もっと知ってね！

エゾシカ

学名 ―― *Cervus nippon yezoensis*
和名 ―― エゾシカ、蝦夷鹿
アイヌ名 ― ユク(総称)、ポイユク（１歳）、リャポイユク（２歳の雌）、リャウ（２歳の雄）、トゥパリャユク（３歳）、ピンネラウ（３歳の雄）、モマンペ（３歳以上の雌）、レパポナプカ（４歳の雄）、アプカ（５歳以上の雄）など多数

分類 ―― 日本列島とユーラシア東部に自然分布するニホンジカ（*Cervus nippon*）のうち、国内最大の亜種。

体色 ―― 夏毛は明るい茶色に白い斑点がついた「鹿の子」模様。中国語でニホンジカを「梅花鹿」と書くのはこのためです。秋に換毛し、冬毛は灰褐色。繁殖期の雄たちは自分を強く見せるために泥や自分の尿を体中に塗りたくるので、焦げ茶色に見えます。

食性 ―― 野草や木の葉、農作物を食べ、冬は主にササや樹皮を食べます。

ひづめ ― スパイクの役目をするひづめを持ち、速く走ることができます。

反芻 ―― ウシのように胃を４つ持っていて、反芻します。最初の胃には微生物を住まわせ、哺乳類が消化できない植物繊維を微生物に分解させてから消化します。ちなみに上の前歯はありません。

枝角 ―― 雄は３叉４尖に分かれた枝角を持ちます。満１歳ではふつう枝分かれしません。角は、雄同士が雌を巡って闘う時の武器。勝った雄は複数の雌を独り占めにすることができます。角は毎年はえかわります。

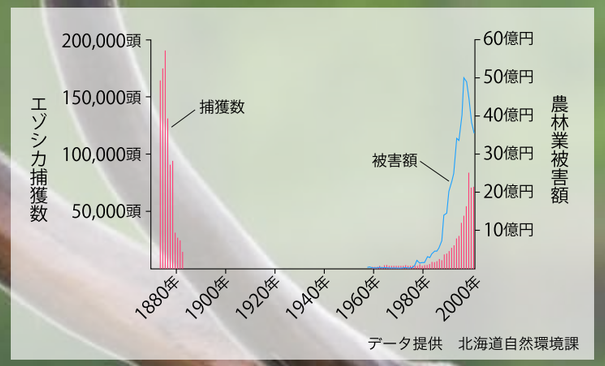
出産 ―― 雌は２歳になると毎年６月ごろ１頭の子どもを産みます。子ジカは生まれて30分もすると歩けるようになりますが、２週間ほどはやぶの中などに隠れてじっとしています。

越冬 ―― 秋までに体脂肪をたくわえて北海道の厳しい冬に備えます。個体によっては、雪が少なく針葉樹の多い越冬地まで数十kmも季節移動します。寒さや積雪の厳しい冬には、多くのシカが死ぬこともあります。

北海道の取り組み

明治初頭、北海道開拓使が外貨獲得のためにもくろんだシカ革やシカ肉の大量輸出計画は、非常な乱獲を招きました。運悪く豪雪にも見舞われて大量餓死が重なり、エゾシカは一時、絶滅寸前にまで激減したのです。政府は方針をシカ保護に切り替え、昭和中期まで続く長い禁猟時代が始まります。

この間、２度の世界大戦を挟みながら、政府は一貫して「北海道開拓」を進め、原生林は次々に農地・造林地に変わっていきました。シカにとっては新しい餌場が出現したのと同じです。天敵だったエゾオオカミは、害獣として徹底駆除され、すでに明治期に絶滅。繁殖力に優れたエゾシカは、たった４年で群れの構成員を倍増させます。保護政策と相まってどんどん増え、やがて1996年には農林業被害金額が50億円に達するほど、農林業食害が深刻化します。



北海道は1989年ごろから、シカの侵入を防ぐ長大な柵で農地を囲んだり、それまで保護してきた雌ジカの狩猟を解禁したりといった対抗策をとりはじめます。97年には全国に先駆けて「エゾシカ保護管理計画」を策定。総合的な科学研究に基づいて対策を更新しながら、人間活動とシカとのあつれきを軽減するとともにシカの安定的な生息水準を確保する――というのが究極の目的です。“増えすぎたシカ”を半減させるべく、年間６～８万頭を捕獲してきました。

しかしシカ害は止まりません。現在の推定生息頭数は50万頭以上とされ、農林業被害に加えて自動車・列車との衝突事故や、世界自然遺産・知床半島などでの希少植物群落の食害が深刻化しています。

シカの増加を止めるには、捕獲するしかありません。しかし狩猟者は減少・高齢化し、また趣味の「狩猟」と、ボランティアに頼らざるを得ない「許可捕獲」だけでは、もはや限界に達しています。そこで北海道では、エゾシカの「地域の自然資源」としての価値を高めることで個体数管理に貢献する「エゾシカ有効活用循環システム」構築を急いでいます。「エゾシカ有効活用のガイドライン」を設けて産学官の連携を図り、2007年には関係団体や大学を交えた「エゾシカ有効活用推進連絡対策協議会（鎌田公浩会長、石子彭培・近藤誠司副会長）が設立されました。協議会は海外調査などを実施しながら、総合的なエゾシカ政策を提言しています。

エゾシカは道知事の許可なしには捕獲できません。「狩猟」と「許可捕獲」の２制度があり、「狩猟」の時期はおおむね10月～3月。「許可捕獲」は狩猟期以外に行なわれます。捕獲法には、銃猟とワナ猟があります。

エゾシカやエゾシカ有効活用についてもっと調べたいときは……
●社団法人エゾシカ協会　http://www.yezodeer.com/
●北海道自然環境課　http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/sika/sikatop.htm

このパンフレットは、(財)秋山記念生命科学振興財団社会貢献活動助成事業（2009年度）の援助により作成されました。

撮影協力　西興部村養鹿研究会

発行　2009年10月1日
編集・発行　社団法人エゾシカ協会　〒064-0803　札幌市中央区南3条西21丁目1-6
TEL/FAX 011-611-8861　e-mail / ida.yezodeer@r8.dion.ne.jp
Copyright © 2009 by Yezo Deer Association

シカとヒトとの共存の歴史

シカは、とても古い時代から私たち人間の生活と密接な関係を保ってきました。およそ１万年前、それまでシベリアからモンゴル北部にかけての一帯でマンモスやオオツノシカを狩猟して暮らしていた人びとが、南に向けて大移動を開始します。気候変動により、こうした大型草食動物が散開したためです。人びとの一部はアメリカ大陸方面に進み、南米チリの南端にまで達しました。別の一派は日本列島に渡り、そのうち、いま北海道と呼ばれるこの島にやってきた人びとは、エゾシカ（の先祖種）を狩りながら、生活の資源としていたに違いありません。彼らは現在の日本人の先祖の一部となったと考えられています。

時代が進んでもヒトとシカの関係は濃密なままです。７世紀から８世紀に成立した万葉集に「鹿の為に痛みを述べて」という歌があります。「私の体は、角から耳から爪から毛から肉から内蔵まで利用でき、それら全てを大君に捧げます」という意味で、人びとがシカを余すことなく利用していたことがうかがえます。戦国時代にはシカ革が武具の素材として重用されました。

狩猟漁撈と交易経済の社会を築いた先住民族アイヌは、エゾシカを「ユク」と呼びますが、元は「獲物」という意味の言葉だったそうです。これもまた人びとがエゾシカに依存して暮らしていた傍証でしょう。道内には、鹿追町（アイヌ名＝クテクシ。シカ追い柵のあるところ、の意味）、南富良野町の幾寅（ユクトラシペッ。シカがのぼる川、の意味）、門別町の幾千世（ユクチセ。シカの家、の意味）など、シカにまつわるアイヌ語由来の地名がいまも数多く残っています。

いっぽう中世以降の本州地方では、古くからの殺生禁断や放生の思想が、庶民の間にまで肉食タブーを浸透させ、徐々に狩猟は衰退し始めます。江戸時代を迎えると、農地の急拡大にともなって、シカは田畑に出没して「害獣」の色合いを強め、駆除対象に変わっていきます。

明治以降は、北海道を含む全国で一律の狩猟規制が敷かれ、政府による狩猟管理が始まることになります。

観光・狩猟

野生のエゾシカの美しい姿は、人の目を惹きつけずにおきません。アニマルトラッキングやネイチャーフォトハンティング、もちろん本物の狩猟の対象として、とても魅力的な天然観光資源です。北海道北部の西興部村では、NPO法人西興部村猟区管理協会がエゾシカを地域資源ととらえ、観光客誘致や環境教育を実践して地域活性化に貢献しています。

食べる

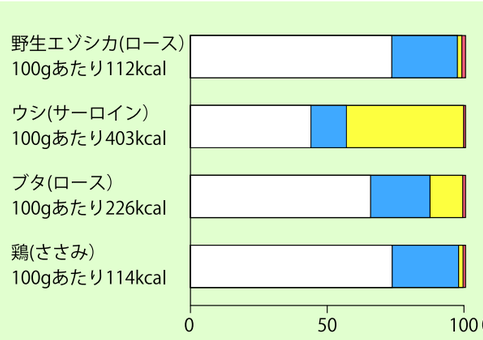
エゾシカのカツレツ

エゾシカ１頭から約20kgのお肉がとれ、じょうずに調理すれば内臓までおいしく食べることができます。肉質は同じ反芻動物の牛肉や羊肉に似ていますが、特筆すべきは、高タンパク・低脂質で鉄分などのミネラルが豊富な点。鉄不足の改善、生活習慣病の予防も期待できます。均質な家畜肉（鶏・豚など）に比べると、エゾシカ肉はシカの年齢・性別などの違いで味にも幅が出ます。美味しくいただくには処理の工夫も大事です。家畜ではないシカは「と畜場法」の適用を受けませんが、北海道では独自に「エゾシカ衛生処理マニュアル」を作成。手順通りに処理されているかどうかを(社)エゾシカ協会が検査し、合格品を推奨する制度がスタートし、エゾシカ肉を安心して味わえる体制が整いました。推奨制度の詳細や、推奨している食肉処理場は協会ウェブサイトに掲載しています。道内ではエゾシカ肉のジンギスカンやスープカレー、カツレツなどをメニューに載せた料理店が人気です。

エゾシカ協会の推奨マーク

エゾシカバーガー

スープカレー



データ提供　岡本匡代・釧路短期大学講師

着る・使う

わたしたちは古来、シカ革を多用してきました。非常に柔らかいのに、折り曲げに強いのが特徴で、アイヌ民族は女性の下着をシカ革で作っていました。また武者のよろいの継ぎ目部分にもシカ革が用いられています。現代では仔牛革や羊革と同様、ジャケットや財布などが製作されています。エゾシカ１頭から約0.8㎡の革（レザー）がとれます。またシカ角は、古代には釣り針や農具として使われ、現代でも各種の工芸品や、カスタムナイフのハンドルなどに利用されています。また中国では、生えてきたばかりの袋角（鹿茸）が漢方薬として珍重されます。

エゾシカの価値